様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：５３９０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2013
課題番号：２４７２０２２６

研究課題名（和文）二重連結動詞構文の発達と派生についての統語的分析

研究課題名（英文）Syntactic Analysis of the Development and Derivation of Double Copular Constructions

研究代表者
中川　聡（Nakagawa, Satoshi）

豊田工業高等専門学校・一般学科・准教授

研究者番号：９０５６６９９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　600,000円、（間接経費）　180,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では is isのようなbe動詞の連続を伴う点で特有の統語的特性を持っている二重連結動詞構文の統語的派生を明らかにした。具体的には二重連結動詞構文は擬似分裂文とは独立しており、2つ目のbe動詞は焦点標識へと文法化されていると分析した。また、Gelderen (2008)の素性の再分析を伴う文法化の枠組みに基づいて、その派生について説明を与えた。二重連結動詞構文でも2つ目のbe動詞の持つfocus素性が再分析され、その結果そのbe動詞はfocusPを占め、それに後続する節に付加していると分析した。

研究成果の概要（英文）：This study clarify syntactic properties of double copular constructions, which are unique in that they invlove the sequence of copular verbs like is is. Specifically, this study presents an analysis where the second copular verbs are grammaticalized into focus markers. In addition, following the analysis of Gelderen (2008), where grammaticalization usually involves the reanalysis of semantic features, the present analysis accounts for the derivation of double copular constructions. It is argued that semantic features of the second copular verbs are reanalyzed in double copular constructions, so that the copular verbs appear in FocusP and are adjoined to the subsequent clauses.

研究分野：統語論

科研費の分科・細目：英語学

キーワード：文法化　焦点標識　擬似分裂文

１．研究開始当初の背景

(1)　本研究で扱う(1)のようなニ重連結動詞構文については擬似分裂文と関連のある構文なのか、それ以外の構文から影響を受けて発達したものなのかが先行研究では統一的な分析がなされていなかった。

(1)　The thing is, is we've got to be strong.
(Coppock and Staum (2004:1))

⑵　本研究で扱うニ重連結動詞構文について統語的観点から詳細な分析を行った先行研究はほとんど存在しなかった。コーパス調査の結果を報告している先行研究では本構文は文法上の誤りではないと結論が出されているので、生成文法の枠組みでどのように派生されるのかを統語的観点から分析する必要があった。

２．研究の目的

本研究の目的はニ重連結動詞構文の発達過程を明らかにすることと、その統語的派生を明らかにすることの 2 つである。発達過程については先行研究で論じられている擬似分裂文との関わりについてコーパスを用いた調査などを通して分析を行う。統語的派生については 2 つ目の be 動詞の統語的範疇を分析し、その分析結果に基づいて生成文法の枠組みで説明を与える。

３．研究の方法

⑴　コーパスを用いてニ重連結動詞構文で観察される主語名詞句と擬似分裂文で用いられる主語名詞句を比較する。この調査によってニ重連結動詞構文と擬似分裂文の関連性が判断される。具体的にはニ重連結動詞構文が擬似分裂文の異形として発達した構文かどうか判断できることになる。

⑵　ニ重連結動詞構文の統語的派生を分析する上で、先行研究で特に問題となっているのは is is という be 動詞の連続における 2 つ目の is の範疇が何かということである。先行研究の分析によれば、topic marker（話題標識）として働いているという可能性、focus marker(焦点標識)として働いている可能性と be 動詞としての機能を維持しているという 3 つの可能性がある。この点においても擬似分裂文との関連性の有無を統語的観点から調べることによって 3 つのうちどの分析が正しいかを検討する。

４．研究成果

⑴　ニ重連結動詞構文と擬似分裂文の関連性について両構文に現れる主語名詞句について現代英語のコーパスである COBUILD Wordbanks Online を用いて調査を行った。その調査の結果、ニ重連結動詞構文で観察される主語名詞句と擬似分裂文で観察される主語名詞句は異なっていることが明らかになった。ニ重連結動詞構文で最も多く観察された主語名詞句は thing であり、その次に多く観察されたのは problem であったが、この 2 つの名詞句は擬似分裂文では極めて稀にしか観察されなかった。したがって、ニ重連結動詞構文は擬似分裂文異形ではなく他の構文の影響を受けて英語において観察されるようになった構文であると結論付けた。

(2)　コーパス調査の結果をふまえて、ニ重連結動詞構文は擬似分裂文の異形ではないという方針で分析を行った。他の構文の可能性として、Brenier and Michaelis (2005)で分析されている Simplex と彼らが呼んでいる⑵のような構文が挙げられる。

⑵　The problem is there's nothing else to buy.　(Brenier and Michaelis (2005:4))

Brenier and Michaelis (2005)は Simplex はニ重連結動詞構文は統語的単位と韻律的単位の不整合という問題があると述べている。言い換えれば is が be 動詞と焦点標識の 2 つの機能を果たしていることになり。この点で不安定な構文であると主張している。そして、この不安定さを解消するために 2 つ目の is を加えられたと主張している。is is という 2 つの be 動詞の連続があれば、Simplex で 1 つの be 動詞が担っていた 2 つの役割が 1 つの役割として分担されることになり、同時に統語的単位と韻律的単位の不整合という問題も解消されると主張している。本研究ではこの分析に従って、ニ重連結動詞構文は⑵の示される Simplex から発達した構文であると主張した。

⑶　ニ重連結動詞構文は Simplex から発達した構文であることをふまえて、is is という 2 つの be 動詞の連続における 2 つ目の is の統語範疇について分析を行った。この is は Simplex の持つ統語的単位と韻律的単位の不安定さを解消するために導入されたということから be 動詞としての特性を維持しているか、焦点標識としての特性を維持しているかのどちらかの可能性に絞られる。ここで、⑶のように主語と 2 つ目の is の間には数や人称の一致が観察されないという Coppock and Staum (2004)での考察に基づいて、その is は焦点標識であると分析するに至った。

⑶　The cruel facts of life are, is that not every person who teaches Art is a good artist himself.
(Coppock and Staum (2004:2))

もし is が動詞であれば⑶でも主語と数の点で一致が観察されるはずだが、それが観察されていない。したがって、⑶の is は be 動詞としての機能を果たしていない、言い換えれば焦点標識として機能しているということになる。

(4)　2つ目のisが焦点標識として分析されるということは言いかえれば be 動詞としての特性を失っているということになる。このことは語彙的な要素が機能的な要素へと変化する文法化を受ける際に観察される変化である。このことをふまえ、統語的派生についても文法化について触れた枠組みに基づいて分析する必要がある。そのような枠組みとして Gelderen (2008)が挙げられる。Gelderen (2008)は文法化を素性の解釈可能性の変化という観点から分析している。すなわち、語彙項目の持つ意味素性がその項目が文法化を受けるに従って、解釈可能素性、その後解釈不可能素性に変化すると主張している。さらに、このような素性の変化が起こることに比例してその語彙項目が占める統語的位置も変化すると主張している。すなわち、語彙的な要素が文法化を受け機能的な要素へと変化するにつれ指定部を占めていた要素が主要部を占めるように変化するということである。

この枠組みに基づいてニ重連結動詞構文における2つ目のisについて以下のように統語的観点から分析した。まず、be 動詞であるisの焦点標識への文法化は擬似分裂文で起こったと分析する。擬似分裂文においてisは焦点の意味が推論されるようになり、その後 be 動詞としての機能と焦点標識としてその機能があいまいになり、最終的には be 動詞としては機能せず焦点標識の機能しか持たなくなった。　そして、この段階でニ重連結動詞構文が英語で観察されるようになったと考えられる。すなわち、擬似分裂文に置いて焦点標識として機能する is が確立されたことにより、Simplex の不安定さを解消する選択肢が英語で現れるようになったということである。

この文法化は Gelderen(2008)の枠組みでは以下のように捉えられる。まず、be 動詞としての役割のみを持っていた is は意味素性としての focus 素性を持っていたと分析する。その後、be 動詞と焦点標識の機能を果たすようになる段階では意味素性としての focus 素性が解釈可能素性へと変化し、最後に焦点標識のみの機能を果たすようになると focus 素性は解釈不可能素性へと変化したということである。

Gelderen (2008)の枠組み従うとこの素性の変化とともに統語的に占める位置も変化するということなので、ニ重連結動詞構文においてもbe動詞としてVPの主要部を占めていたisが焦点標識として Foc(us)P を占める要素へと変化し、後続する that 節に付加するようになったと分析した。

(5)まとめ

本研究ではニ重連結動詞について擬似分裂文との関わりと、その統語的派生を中心に分析を行った。ニ重連結動詞構文は擬似分裂文から独立して発達した構文であり、Simplex の不安定さを解消するために焦点標識としての is が加えられたと主張する Coppock and Staum(2004)の分析を支持をすることとなった。また、isの焦点標識への文法化については Gelderen (2008)の素性変化に基づく枠組みで説明を与えた。Be 動詞から焦点標識へと文法化するにつれ、focus 素性の解釈可能性が変化し、それに伴い統語的に占める位置もVPの主要部からFocPの主要部へと変わり、後続する that 節に付加するに至ったと分析した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１　件）

①　中川　聡「ニ重連結動詞構文についての一考察」豊田工業高等専門学校研究紀要、査読なし、第46巻、1

〔学会発表〕（計　0　件）

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

中川　聡　　（NAKAGAWA Satoshi）
豊田工業高等専門学校・一般学科・准教授
研究者番号：90566994

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：